

へき地教育の可能性
－ 阿嘉島の地域特性と教育について －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
喜納 裕策

高校英語の教材研究として、筆者は、先の世界大戦においてアメリカ軍が最初に上陸した沖縄県慶良間諸島の一角、阿嘉島を訪れた。たまたま島民と話をすることがあり、筆者は島民から、島内唯一の学校、阿嘉幼小中学校について「学校は島の宝」という言葉を聞いた。学校に対して批判的な意見が飛び交っている現代において、学校を全肯定しているとも受け取れるその言葉は、筆者にとって大きな衝撃であった。阿嘉島は「へき地教育振興法」および「へき地教育振興法施行規則」において4等へき地に指定されている、へき地教育を行っている島である。ムラ意識が強く排他的で、生産業が多く、過疎化が進み限界集落化しているという一般的なへき地のイメージがあるなかで、阿嘉島は観光を中心として第3次産業が栄え、島外からの移住者も多いため、必ずしもそれらのイメージと一致しない。さらには阿嘉幼小中学校に通う子どもたちの保護者の多くは島外からの移住者であるにもかかわらず、島民たちは全力で学校教育をバックアップしているという。

一般的に、へき地教育の特性として「へき地性」「小規模性」「複式形態」が挙げられるほかに、自然を使った自然体験型学習が行いやすい、地域や保護者の協力が得られやすいといった側面がある。

へき地の中でも一般的なイメージと異なる特性のある阿嘉島において、地域と学校はどのような関係で結ばれているのか、またそれは子どもにどのような影響を与えているのか。これらを明らかにすることは、同じへき地のなかでも一味違った地域性を持つ場における事例研究として一考の価値あるものと考えられる。また、当該地域と学校が信頼関係で結ばれているとするならば、現代における地域と学校の関係の希薄化に対して一石を投じるための1つの材料になり得る。

本研究では、阿嘉幼小中学校教職員と中学部生徒、その保護者と島外地域住民にインタビュー調査を行い、得られた回答に基づく分析を行った。その結果、当該地域と学校の間には、信頼関係の上成り立っている、教育への協働の形があることがわかった。そしてその形は、非行がない、素直である、誰とでもあいさつできる等の子どもの人格形成に影響を与えていると考えられると結論付けた。